

ディアスポラとしてのジャクソンが
もたらす攪乱と解放

有馬 弥子

Perturbation and Liberation in *Jackson's Dilemma*:
Jackson's Role as a Diaspora

Hiroko Arima

Abstract

The title of the last novel by Iris Murdoch, *Jackson's Dilemma*, implies that Jackson is the protagonist. However, he appears to play a supporting role, always assisting others to come to terms with their true inner selves. What is he? Where does he come from? In the end, readers realize that these questions remain unanswered. Throughout the novel, it is only vaguely implied that he may be from somewhere in South Asia, and he remains a mysterious figure. What is his role, then? Indeed, he plays a vital part in making other main characters face their true selves and take steps towards unexpected choices in their lives. He acts as a catalyst. What enables him to play such a role? The present paper interprets Jackson as a diaspora. His diasporic, fluid identity enables him to let others realize unexpected opportunities to free themselves from the confines of their conventional ways. In this sense, his influence is both perturbing and liberating. The other point of the paper is that his fluid identity echoes what Uncle Tim and Benet perceive as existential “loss of identity,” a state that is both unsettling and merciful. Through their exposure to non-entity and novelty represented by the diasporic Jackson, these characters experience both perturbation and joy.

キーワード：アイリス・マードック、『ジャクソンのジレンマ』、ディアスポラ、南アジア系ディアスポラ、ポストコロニアリズム

Keywords : Iris Murdoch, *Jackson's Dilemma*, diaspora, South Asian diaspora, post-

colonialism

I.

1. はじめに

アイリス・マードック (Iris Murdoch) が亡くなる四年前1995年に発表した絶筆、*Jackson's Dilemma* (『ジャクソンのジレンマ』) は、マードックがアルツハイマーを患うなか執筆されたが、出版翌年1996年にヘプトンストール (Heptonstall) には絶賛され、カクタニ (Kakutani) には酷評された。

『ジャクソンのジレンマ』の主人公は誰なのか。その結論は、題名の Jackson (ジャクソン) であると言える。しかし、物語はジャクソンを雇い入れる成りゆきになるベンディーン館の所有者 Benet (ベネット) の視点から語られ始める。最も長い初章では、最終十一行のみで初めて「現われた」「暗い人影」(70) としてだけジャクソンが登場する。しかも当部分でもベネットの使用人であるところ短く言及されるのみである。これに続く章でも、多くの場合、ベネットの視点から物語が進行する。ジャクソンとの関係においては、多くの登場人物の中でもジャクソンとの関わりが最も濃く、プロットが展開するにつれジャクソンに最も執着心を抱いていくのがベネットである。当初、ジャクソンが登場人物たちのサークルに立ち現れた際に、最も強い拒否反応を示したのもベネットであったのだが。ジャクソンはもちろんのこと、ベネットもまたこの物語の主人公なのではないか。このように本論ではあえてジャクソンとベネットを対等に並べ、その関係性を読み解くことを試みる。それによって本作のテーマが、これまでの先行研究とは異なる側面から明らかにされると考えられるからである。

2. ジャクソンとベネットの関係性の推移

まずベネットがジャクソンを雇う前の段階では、ベネットは異質な不可解な存在に対し恐怖さえ感じ、ジャクソンを一度ならず拒否する。しかしインドに滞在し仕事をしていた経験をもつティム伯父 (Uncle Tim) はたちまちジャクソンに魅了される。ベネットも周囲の者たちもティム伯父のことは崇拜していた。そのティム伯父が有無を言わずベネットにジャクソンを雇わ

せる。ここまでの時点で、ベネットは既にジャクソンに惹きつけられていたと解釈することが可能である。まず、謎めいたジャクソンに対してベネットが当初感じた激しい嫌悪感にさえ近い違和感は、後にベネットが誰よりもジャクソンに執着するようになる経緯を見れば、ただならぬ好意の裏返し、その前兆とも言える。また、ベネットや二軒の屋敷を取りまく人々がティム伯父をあがめていることも、ベネットたちがジャクソンと関わる運命になる伏線となっている。ベネットらはティム伯父を通じ、ジャクソンと、そしてジャクソンが象徴する東と関わっていくのである。

ここで注目しておくべきことは、ジャクソンやティム伯父は明確ではない存在として提示され続けることである。ティム伯父は、ベネットにジャクソンを雇わせた直後に亡くなってしまふ。その後全編にわたり、ティムの残した様々な異国的な調度品について、またティム伯父ならこういう時こうしていただろう等々の考えについての記述が繰り返される。ベネットと人々にとって精神的拠り所でもあるティムが故人であることは、ベネットの所在なさと同関係ではなからう。生前に、実存的なよるべなさについて哲学的な指針を示してくれたのもティム伯父であった。

Ever since childhood Benet had wondered what [Benet] looked like. This wonder was connected with 'Who am I' or 'What am I?' Benet had discovered quite early in life that Uncle Tim shared this lack of identity. . . . Tim had said that. . . it was a gift, an intimation of a deep truth: 'I am nothing.' (11)

一方ジャクソンについては、ボウヴ (Bove) は作者自身の言葉を借りマードックが故意に「クリスタラインな」¹ジャクソンを避けているとしている(248)。ベネットが失いたくないジャクソンも、またティム伯父も既に故人であるがゆえに、あくまでもクリスタラインではない。

当初ジャクソンがティム伯父とベネットに雇われた頃には、ジャクソンとベネットは主従関係にあった。ジャクソンは使用人としてベネットの生活上の物理的助けをしていた。しかし、ジャクソンがティム伯父やベネットや周囲の登場人物たちに与えていく影響力は次第に増していく。そもそも住み込みで雇われているジャクソンがベネット以外の周囲の人々の人間関係にまで踏み込む雇用上の必要性はなかったはずである。しかしエドワード (Edward) とマリアン (Marian) の結婚が当日の朝に破談になった後の悲劇とも喜劇ともつかないどたばたでは、要所要所でジャクソンが諸人間関係の

もつれを解決に導いていく。最後にはシェイクスピア喜劇さながらに思いもかけない三組の男女関係が生まれる。六人のハッピーエンディングについてジャクソンは大いに感謝される。こうした過程を経て、ジャクソンは生活上のベネット個人の使用人以上の存在になっていく。

特にベネットは心情的にもジャクソンを必要とするようになっていく。ジャクソンが周囲の人々の諸関係の解決に極度なまでに身を粉にして奔走している間、それを知らぬベネットは彼が屋敷に不在がちになっていくことを不快に思う。ベネットは次第に不満を募らせ、「怒りによって」(ボウヴ 242-243)、つまり一時的な感情からジャクソンを解雇してしまう。この場面において、ベネットがジャクソンの不在に対する不服をそのような形で示せなかったことは、この時点でのベネットの限界である。既にジャクソンが自分にとって精神的に使用人以上の存在になっていたにもかかわらず、ベネットは当初の主従関係でしかジャクソンを見ることができなかったのである。ベネットの「怒り」とそれを示す方法としての解雇は、ベネットのジャクソンに対する所有欲の裏返しである。解雇という方法自体が雇用者と被雇用者の主従関係の体現にはかなならず、それがジャクソンの不在の何の解決にもならないことにベネットは思い至らない。それどころかジャクソンを失う結果になるのである。

3. 主体²として立ち現れるジャクソン

これらの過程において注目すべきことは、ジャクソンがあくまでも生身の主体であることが明らかにされていく点である。ジャクソンは多くの先行研究においてキリスト、ヒンズー教の神等々になぞらえられ、神格化されたり理想化されたりしている。しかし本論では、ジャクソンをベネットらと対等の一個人と見ることにより、ジャクソンの内面に踏み込む。一貫してジャクソンを生身の主体として捉えることにより、本作品中のジャクソンの役割を読み解くためである。

たとえばマリアンとノルウェー系オーストラリア人の恋人を引き合わせた後のジャクソンの疲労について見てみる。二人の間をとりもつことに成功するに至るまでに、ジャクソンは何日間か睡眠も食事もろくに取らず、二人を再会させた後、倒れてしまう。この場面については次の二点で、作者がジャクソンをミッションを貫徹する理想的な超人的ヒーローというよりは、生身

の一個人として描こうとしたように思われる。一に、一人ロッジに戻った後、ジャクソンは精神的な疲労もあいまってワインを飲み、衣服も乱れたまま倒れ眠ってしまう。しかし、ジャクソンはこの時までアルコールを口にすることがほとんどなかったとの記述がこの下りで繰り返される。ベネットらはジャクソンだけが酒を飲まないことを当然のこのように見なしていたようである。使用人としか見なしていなかったジャクソンだけがストイックであることに、ベネットは一抹の疑問を抱いたことすらなかったのか。二に、ベネットら、特にベネットはこの時まで、ジャクソンが女性と個人的な関係をもつ様子がなかったことを、これまた当然のこのように見なしていたようである。このため、ジャクソンがアルコールの匂いをさせ半裸で倒れているのを発見したベネットは、ジャクソンがそこで女性と肉体関係をもったと瞬時に誤解し激昂する。ベネットらは、自分たち自身がジャクソンの人となり大いに魅力を感じているのだが、なぜジャクソンが特定の異性なり同性なりと恋愛関係をもつ可能性を露だに認識していなかったのか。きわめて有能で人柄が魅力的なジャクソンを自分たちと対等には見ていなかったからであろう。ベネットらにとってここまでの時点で、ジャクソンはあくまで有用でかつ共にいて非常に快い使用人の位置にしかいなかったことが明白である。

この場面は、ベネットらのこのような認識の限界を超えて、ジャクソンが主体的なしかも生身の個人として行動することが提示される物語の分岐点となっている。ここまでは、ジャクソンは他者を惹きつけるが自分自身が他者に惹きつけられることはない、周囲と距離を置いた人物として描かれている。また、本作品全般について、ジャクソン像をそのように捉える解釈も何点かある³。しかし、発見したマリアンを介抱する場面で、ジャクソンは思わずマリアンに好意めいた感情を抱いている。“He looked at her and thought how beautiful she was. He was about to say, how beautiful you are” (148). ただしそれを明らかにする言動は全く取らず、このことは読者にのみ示される。つまり、読者はベネットらに先じて、ジャクソンの主体的な感情の一端を垣間見るのである。

また、この場面は、ベネットがジャクソンに対して抱き始めていた、使用人に対する以上の感情が決定的に明らかにされる点でも分岐点である。ジャクソンが主体的な個人として女性と関係をもつ可能性がちらついた時のベネットの動揺の激しさは尋常ではない。ベネットはここで主人として使用人

の行動を叱責するかのようふるまうが、実際には嫉妬心、猜疑心をむき出しにしているだけである。この時点を境に、ベネットとジャクソンの表面上の主従関係が変化していく。あるいは、対等な関係に変化していくとも言える。ジャクソンを解雇する置き手紙を残すものの、実際にジャクソンがいなくなると、ベネットは取り返しのつかない喪失感と後悔の念にさいなまれ、心神耗弱状態に陥る。ここに至り、ベネットのジャクソンに対する感情が、同性愛的なものなのではないかという解釈さえ可能になる。

結局ジャクソンがベネットのところへ戻る顛末となった後、ベネットはジャクソンに対する威圧的で突発的な言動を反省し、ジャクソンに使用人としてではなく「友人」としてとどまってくれるように懇願する。ここでベネットは自分が、生活上の使用人として以上に心情的にもジャクソンを必要としていることを認め、かつ、それを初めて、対等の個人どうしとして、ジャクソンに率直に伝える行動を取る。この変化を、主要な批評では、ジャクソンの使用人から「友人」への「昇格」であるとしている⁴。感情面では関係が逆転したとも言えるかもしれない。

しかしここで、ジャクソンの側の感情についても見てみると興味深い側面が見えてくる。先にジャクソンの心身の疲労が生々しく描かれている場面に言及したが、その際ジャクソンがベネットにどう思われるか、ことさら気にし、少なからず動揺する様子が描かれている。目が覚めた時ジャクソンは、キッチンも自分自身もひどく乱れた様子であることに仰天する。マリアンを助けることは最終的にはベネットらを助けることでもあることは確信していたが、室内や自分のこのような様子を人に、特にベネットに見られはしなかったかと思い呆然とする。ベネットは自分がどれほどマリアンらのために尽力したか理解するどころか、むしろ誤解し怒るのではないかという思いがかすめる。恐れは的中し、テーブルにはジャクソンを解雇することを言い渡すベネットによる手紙が残されていた。

これを発見し読んだ後のジャクソンの反応が興味深い。この場面でジャクソンの側もまた、ただならぬ衝撃を受ける様子は、単に職を失い明日からの生計の見通しが突然失われてしまったことについてのショックだけのように思われぬ。ジャクソンもまた、かなりの程度までベネットにある種の慕わしい気持ちを抱くに至っていたように思われる。まず、手紙を読み終えた直後しばらく動けなくなり激しく後悔する。手紙の結びに残された“I trusted

you”というベネットの走り書きが特にジャクソンの心に突きささる。

Then he stood motionless, looking down, for some time. Then he sighed deeply. What a senseless blunder. . . He uttered a long sobbing sigh. 'I trusted you.' (158)

...

A terrible anguish crushed his breast. Everything had come down. . . . He felt he was going mad. . . he was ready to weep. . . (161)

この後ジャクソンが自身の身のふり方の決め方を含めどう行動するかが、ジャクソンがこの手紙から受けた衝撃が大きく、理性を失っていることを示している。ベネットの疑いは真実ではないことを、事実を、ベネットに論理的に説明し許しを乞う、あるいは少なくともそれを手紙に書き残すといった理性的判断には全く至らない。

. . . should he leave any sort of statement, explanation, apology in the hall for Benet to see. No, there was nothing to say. (161)

...

Should I not simply *stay here* and tell him what happened? . . . Somehow he could not bear it, to have to explain or apologise or crawl to Benet. (160)

ベネットの誤解が感情的なものであるように、ジャクソンの反応もまた、理性的とはほど遠いのである。

また、ベネットの側では、ジャクソンが居所さえ明らかにせず好き勝手に出歩いていたと感じ、それがいら立ちや疎外感にさえつながっていたわけであるが、この点についてもジャクソンの側からの見え方が提示されている。ジャクソンは、不在にする場合には必ずベネットに伝え、かつ不在にしてもよいか尋ねていたと振り返る。しかも、その際ベネットはこれと云って興味を示さなかったり、またはベネット自身出かけていたというのである。

“. . . surely he had almost always *told* Benet, and asked—Benet was often not interested or away.” (161) つまりジャクソンから見て、自身の不在がそれほどまでにベネットを悩ませていたようには見えていなかった。むしろ、ベネットのほうがジャクソンの不在も存在もさほど気に止めてはいなかったかのようにジャクソンには映っていたようである。ベネットに一方的に解雇されてしまうに至り、ベネットにもっと気に止められ拘束されたかったとまでジャクソンが思ったのかは定かではないが、少なくとも、ジャクソンの側の

感じ方もまたあったということが読み取れるのである。

4. ジャクソンとベネットの関係の行く末が意味するもの

このようにベネットとジャクソンの関係を両側面から詳細に見てみると、作者が故意にこの二人の間の上下関係的な境界線を常に取り払おうとしていたことが明らかになってくる。まず、ベネットが情動的にジャクソンを必要とするようになっていく過程を通じ、当初の雇用者と被雇用者との主従関係の境が定かでなくなる。そしてジャクソンは使用人から友人に「昇格」する。しかし、だからといって感情的にジャクソンが常に優位に立ち、ファム・ファタルさながらに自身の魅力によりベネットを支配するようになるというわけでもない。

作者は、ベネットとジャクソンの関係を徹底して類型的図式からはずそうとしたように思われる。作者は一貫してジャクソンを「クリスタライン」ではない存在として描こうとした。それと同時に、ジャクソンとベネット、そして二人の周囲の人々との関係について、決して「クリスタライン」にならないようにしたと考えられる。ジャクソンの働きによって、マリアンとオーストラリア人の恋人カンター（Cantor）、ロザリン（Rosalind）とテュアン（Tuan）、アンナ（Anna）とエドワードという三組のカップルがいわばクリスタラインに成立するのだが、ジャクソンだけは誰ともクリスタラインには結びつかず、四組目のカップルが成立するという運びにはならない。たとえば彼が二屋敷をとりまく人々のサークルの周辺のいずれかの女性と結びつくことはない。あるいはベネットと何がしかの安定的な関係をもっていくという展開にもならない。人々にとってジャクソンが魅力的なので、そういった類の展開があってもおかしくはないのだが。しかしそれではこの作品は単なる*The Comedy of Errors*のヴァリエーション、四組カップルができたという図式で終わってしまおう。

作者は本作品をあくまでも喜劇とも悲劇ともつかない、クリスタラインではないものにし、特殊な魅力をかもし出そうとしたのではないか。もしも仮にベネットとジャクソンが四組目の擬似カップルになるならば、そこには、ジャクソンに戻りとどまってくれるように懇願したベネットがジャクソンに精神的負い目を負っていくという図式が出来上がってしまうかもしれない。しかしそれでは、ジャクソン自身のこのような魅力、また本作品のこの

ような魅力は失われていたのではないか。

ボウヴは本作品の終わり方について、読者は「宙吊りにされる」としている (247)。ジャクソンにある種の思いを抱いているベネットも宙吊りにされているとも言える。しかし、ジャクソンはベネットを宙吊りにし、ふり回すファミ・ファタル的存在なのではなく、そもそも自身が、「宙吊り」的な存在、クリスタインではない存在なのである。ボウヴは、結末でジャクソンが来し方行く末を思いめぐらす場面に言及し、ジャクソンが「デラシネのノマド的生き方を捨てる気にはなれないらしい」としている (247)。この部分だけを見るとボウヴはジャクソンのデラシネ的、ノマド的生き方を若干批難しているように聞こえなくはない。問題は、デラシネであること、ノマド的であることが本作品の中でどのような意味を与えられているのか、である。

II.

1. ディアスポラ⁵としてのジャクソン

ジャクソンがベネットの申し出に安住しないのは、ベネットを宙吊りにし不安にするためなのか。否、ジャクソンはベネットを占有しようとは考えていないからではないか。安住せず安住させないノマドは他者をクリスタインに支配したり束縛したりはしない。ジャクソンはディアスポラなのである。

クリフォード (Clifford) によれば、ディアスポラの特徴は、一地点に根をおろしはせずに、ある場所に住んではいても例えば出自の国など別の場所を思い出すなどの緊張状態を保ち続けていることにこそあるとしている (255)。ジャクソンが安住しようとはせずに他者との関係を固定的なものにしようとはしないことは、ディアスポラ的緊張状態であると考えられる。ジャクソンがディアスポラであるという解釈は、サフラン (Safran) による具体的な現代におけるディアスポラの定義からも可能であるように思われる。サフランはディアスポラについて原義のディアスポラよりは多くのカテゴリーの人々——たとえば国籍離脱者、国外被追放者、政治的難民、外国人居住者、移民、そして民族的・人種的マイノリティー——を比喩的に指している (84)。ジャクソンが南のどこかから来たらしいとされていること、ヒマラヤの山々と神秘的に関連づけられていること、ロンドンで橋

の下にいたと記述されていること等々は、サフランの多様な記述を連想させる。また、ジャクソンの人物像と彼が周囲の登場人物にもたらすものの意味は、現代におけるディアスポラ諸研究において強調されているディアスポラの肯定的な役割に着目することによって明らかにされるように思われる。クリフォード、バーバ (Bhabha)、ラダクリシナン (Radhakrishnan) らはそれぞれ、一地点のみに根をおろさないディアスポラの緊張状態が果たす媒介する役割 (Clifford 255)、文化の中間者としてのディアスポラの役割 (Bhabha 53)、またいずれの場所に対しても批判的であるがゆえに健全で啓蒙的な視点を持ち得る役割 (Radhakrishnan 210-212) をあげている。ジャクソンは他者のことも自身のことも固定的な関係ではなく敢えて緊張関係においたままにし、それにより人々の間で新しい視点を提供する中間者となることもある。これらの一面では不安定な在り様が人々に対し時には破壊的な影響をおよぼすこともあると同時に、動的であるがゆえに人々をより健全な結果に導いたりもする。固定的で安定することが常に最上の選択であるとは限らないことを、ジャクソンは自分のディアスポラ性の体現によって人々に示していく。

このようにディアスポラとしてのジャクソンは本作中一貫してクリスタラインなアイデンティティーを持たない人物として提示され続ける。固定的なアイデンティティーを持ち得ないからディアスポラである。ポウヴによる、宙吊り、デラシネ、ノマドの等々の表現は全て、ディアスポラ的事であること不安定性や不安に言及していると考えられる。本作品中のディアスポラ性の中核となっているジャクソンは、登場人物の誰とも安定的なクリスタラインな関係にならずに物語は終局に至る。ジャクソンは決してクリスタラインにならないディアスポラ的エネルギーを放ち続け、結論部でもそのエネルギーは失せない。それにより、本作品全体がディアスポラ的エネルギーを放ち続ける。また、本作品の結論もどたばた喜劇のクリスタラインなめでたい結末だけではなく、ディアスポラ的な不可思議なオープンエンディングとなっているのである。その結末はしかし悲劇的というわけでもない。何か決定的な悲劇的結末、たとえばベネットとジャクソンは再会せずにジャクソンが戻ることはなくベネットは河に身投げするなど、が提示されることはない。喜劇とも悲劇ともつかない、このようなアムビヴァレントな終わり方そのものが、喜劇と悲劇の境界線を曖昧にしておりディアスポラ的事であるとも

言える。このようなディアスポラ性が本作品の特殊な魅力につながっていると同時に、本作品の重要なテーマともなっているのである。

ここで、本作品においてジャクソンがディアスポラとして果たしている役割について見てみる。ベネットも本人たちも全く予想していなかった三組のカップルが最終的に成立するにあたり、そこに至るまでの要所要所でジャクソンが関わっている。ジャクソンがベネットとこの六人に、それまでそれぞれが固執していた状況やアイデンティティーの殻を破り、歩み出していくきっかけやエネルギーを提供していく。良きにつけ悪しきにつけ、固まっている状況を突き崩していくのがディアスポラの果たし得る役割である。固まらないのがディアスポラ自身のディアスポラたるゆえんなのだから。イギリス女性としてイギリスの屋敷所有者エドワードと結びつくのが当然の幸福な定めであるかのように仕組まれたマリアンであったが、彼女に、異国の情熱的恋愛の相手であり、しかし行きずりで終わったかもしれない恋人カウンターと結びつく選択肢に気付かせるのはジャクソンである。

これらの過程はしかし、どたばた喜劇や推理小説のようなスリリングな面白みに満ちているものの、むしろある意味破壊的でさえあるエネルギーに導かれている。このエネルギーこそがディアスポラ的エネルギーなのである。そのディアスポラ的エネルギーの中心にある、自身がディアスポラであるジャクソン自身はどうか。これらの過程において大いにディアスポラ的エネルギーを放ち続け人々を見事な結末に導いていくのだが、触媒⁶として機能するディアスポラ、ジャクソンは、自分自身を破壊してしまうほどのエネルギーを使ってしまっている。

ジャクソンは最終章の結論部において、折々呼吸ができなくなる瞬間や記憶が失われる瞬間を体験したと振り返り、死が近いとさえ感じる。この最終場面はいわばジャクソンによる独白で締め括られる。独白中ジャクソンはたびたび、自身の「力」について言及する。自分の「力」は失われてしまったのではないか、それともそれはまだ戻るのかという自問自答を繰り返している。その後でしかし最終的には、自分にはまだ「力が残っている」としている。だが、その力は何のための力なのか。同じセンテンスの中で、力が残っていて、いつでも自分自身を破壊することができるのだとさえ言っている。また一度「力」とその喪失と回復に言及した直後に、「狂気はむしろいつでも身近にあった」ともしている (347-348)。

Sometimes he had a sudden loss of breath, together with a momentary loss, or shift, of memory. So he was to wait, once more, forgetfulness, his and theirs. He thought, my power has left me, will it ever return, will the *indications* return? No assignment. . . . Madness of course always now at hand. . . . To the mountains. . . . Stay with Benet—among the rich—seeking poor? . . . Assigned? . . . But he had come to the wrong turning. With Benet, had he finally made a mistake? Have I simply come to the end of my tasks? . . . My powers have left me, will they return. . . ? . . . [Y]et my strength remains, and I can destroy myself at any moment. Death, its closeness. Do I after all fear those who seek me? . . . Was I in prison once? I cannot remember. (248-249)

ジャクソンがこだわり続けている「力」は、破壊力や狂気を伴っているようである。いったいジャクソンは何を破壊するのか。なにゆえに狂気に走るのか。

ジャクソンの内なる「力」とはひと所、あるいは、とある特定の状況にとどまることを拒否するディアスポラのエネルギーである。最終場面でジャクソンは、自分がこのままベネットと共に、裕福な人々と暮らしていくのか、それが正しい選択なのか、逡巡する。そこに安住してしまうことにジャクソンは少なからず迷いがあるようである。ベネットやベネットの周囲の人々と暮らしていくことは、自分に「与えられた仕事」なのか、それともそれは「間違い」であり、自分はただ単に「仕事の終わり」にきてしまっただけなのか。もしも、ベネットのサークルの中で暮らしていくことが、ジャクソンにとって「仕事」の終わりなのだとすれば、ジャクソンがこれまた繰り返し言及する「仕事」とは何を意味しているのか。

ジャクソンがこの場面で「力」と共に繰り返し唱える「仕事」とは、ディアスポラとして固定的状況を攪乱することなのではないか。自分は、「力」つまりディアスポラのエネルギーやディアスポラ性を失い、ディアスポラとしてすべきこと、できることを放棄するのか。固まっているものをあえてかき乱し、人々を解放する任務を投げ出し、明日の糧を憂う必要のない暮らしに安住するのか。

2. ディアスポラとしての微笑み

最終的にジャクソンは、友人として一緒に暮らしてほしいというベネット

の求めを完全に拒否するというふうでもない。物語は「しだいにペンディーンが近づいてくると、彼は微笑みを浮かべた」という一文で締め括られる(348)。この時ジャクソンの胸をよぎるのはしかし、「これからなすべきことをしなければいけないのに、もうどこへも身動きがとれないところへ来てしまった」という後悔めいたものである。そして、様々な思いを「振り捨てて立ち上がろうと」しても「不思議な感じ」がしてならない(348)。“As he came nearer now to Penndean he began to smile.”(249) 様々な思いを胸にペンディーンに向かうかに見えるジャクソンが浮かべる微笑みは、少々不吉でさえないか、その不可思議性ゆえに。はたして彼はこの後、ペンディーンに戻るのか、それともまたどこかへ消えるのか、それともとうとう力尽きて亡くなってしまふのか。これほどまでに読者を宙吊りにするオープンエンディングである。しかしやはりジャクソンのこの微笑みには魅力もある。その魅力の源は何なのか。物語が締め括られるこのセンテンスでのジャクソンの微笑みはあくまでもディアスポラとしてのそれであり、その複雑さの意味は重層的である。

なぜジャクソンは裕福な安住を目の前に提供されながらディアスポラであることをやめないのか、自身のディアスポラ性を放棄しないのか。この問いについては二つの側面の解釈が可能である。一にジャクソンを純粹に生身の個人として見た場合である。決して明らかにされることはないものの、ジャクソンの出自や生い立ちや過去を読者として想像してみる時、ベネットらには時には不可解なジャクソンの側の理由が浮かび上がりはしないか。二にジャクソンの側の個人的な特殊な事情は、かねてからティム伯父も提唱していたアイデンティティーの喪失や無私のテーマと通じ合うという点である。一の一個人としてのジャクソンの過去や事情についても、二の普遍的テーマについても、故人であるティム伯父が関わっており、ティムによりこの二側面が結びつけられると言ってもよい。一のジャクソンの過去や生い立ちについて、作者はあえて明白にすることを拒み続けて物語を終わらせているが、それらは一面ではベネットら裕福なイギリス人のそれらとはかなり乖離している。作品中のモチーフとして繰り返される「山」への言及から、ジャクソンはインドのヒマラヤ地方から来たのかもしれないということが仄めかされる。他にはイギリスより南のどこからか来たとしかわからない。いつ、なぜ、どのようにしてイギリスに来たかはついぞ明らかにはされないが、橋の下で

段ボールの中にいたという。ミルドレッド (Mildred) がストリートや橋の下で貧困のさなかに生きる人々に奉仕することを考えるとき、インドもさることながら、足元ロンドンにそのような人々がいることに思い至り、インド行きを取りやめる。ジャクソンもまたそういう人々の一人であった。また、先の引用最終場面にはジャクソンは過去にどこかで犯罪を犯し、今でも追われているらしいということをおわす記述さえある。ジャクソンの容姿についての記述はそれほど詳しくはないものの、黒髪に浅黒い肌をもつとの描写はあるので、アングロサクソン系のイギリス人ではないことは確かなようである。複数の東洋の言語を話せるという記述もある。自分自身では年齢を明かすこともない。また、物語中一度もファーストネームが出てこない。また、はたしてジャクソンにどういう家族や親族がいたのか、いるのか、といった記述は皆無である。

ジャクソンについて断片的に神秘的に提示されるこれらの諸要素を一通り並べてみるだけでも、ジャクソンが裕福なアングロサクソン系の人々との表面上は穏やかな生活というものに安住できるものなのかという素朴な疑問が浮かび上がりはしないか。ロンドンで橋の下で共にいた人々、南欧なりインドなりにいる家族や親族を完全に忘れ去ることはできないかもしれない。あるいは監獄に入っていたことがあるならば追手が来ることもあるかもしれない。もちろんこうした憶測は読者の想像の域を出ないのだが、ベネットらはジャクソンについてのそのような様々な可能性を想像することはないのだろうか。ベネットらはジャクソンにそうしたことを尋ねたり問いただしたりはしない。それはベネットらの想像力の欠如、無理解であると解釈することも可能かもしれないが、一方ではティム伯父はもちろんのこと、ベネットらにはディアスポラであるジャクソンを無条件に受け入れる精神的土壌があったとも考えられる。

3. ディアスポラ、ジャクソンが象徴するものとの融合

しかし、本作品において、ジャクソンが象徴している東洋、東洋的価値、無私、貧困といった諸要素は、ジャクソンのみに集約されているわけではない。たとえばティム伯父やミルドレッドは実際にインドとイギリスを行き来し、東洋での経験、東洋的価値観に対する造詣に溢れている。マードック自身がどれほど東洋の哲学や宗教に精通していたか、ここで言及するにはおよ

ばないが、マードックも、ジャクソン以外の本作品中のイギリス人登場人物たちも、生活の拠点はイギリスの屋敷やロンドンにおきつつも東と西を行き来している。屋敷やロンドンの別宅での裕福な生活を送りつつも、実存的な問いや迷いとも向き合い、東洋哲学や宗教にも傾倒している。当初ジャクソンを拒否するベネットも、ジャクソンに出会う前からティム伯父を通じ、アイデンティティーの喪失やそれと通ずる無我の哲学について理解する感性を持っていた。つまり、本作品の中で東洋と西洋、東洋的価値観と西洋のそれ、東洋を象徴するジャクソンとそれ以外のイギリス人登場人物たちとの関係は二項対立的に⁷提示されているわけではないのである。

ジャクソンのディアスポラ性が、ベネットをはじめとする登場人物らにとってのイギリスの主流的固定観念に揺さぶりをかけているのだが、ベネットらは特にティム伯父を通じ、ジャクソンと出会う前から既に、イギリス島の外の文化や価値観にさらされる経験を経ていることが、本作品の通奏低音となっている。

4. 結論

本作品は1995年に出版された。その十年以上前、1980年代後半のイギリスの状況について、中井は1989年のルシュディ事件に言及しつつ、主流派イギリス人とそうでない人々のあいだの緊張が高まりつつあったとしている（75）。絶筆となった本作品においてマードックは、しいて主流派、非主流派という従来の分類で言うならば、主流派イギリス人とでもいうべきベネットらと、イギリスにおける非主流派とも言えるジャクソンを対比させつつも、ベネットとジャクソンの関係性において、その二項対立的対比が、曖昧にされ取り払われていく様を描き出した⁸。しかも、その関係性を、あくまでも安住はしない、つまり固定的な着地点をあえて避け続ける、あくまでも流動的な融和として提示しようとした。これこそがディアスポラ的な融和性であると言える。それは不安をも伴うのだが、可変性、流動性を失った固定的な関係において生じがちな膠着的な差異、上下関係、差別関係等々を回避し、自由で開放的なエネルギーに満ちているものでもある。ジャクソンは、ディアスポラとして、固定化しがちな人々との関係性や思考や状況を攪乱し活性化させ、人々を自由な発想に導き解放する。ジャクソンは人々の心の解放をもたらす触媒的な役割を担っているのである。ジャクソンにより攪乱され解放

される人々の喜劇とも悲劇ともつかない展開をこのように読み解くと、ジャクソンによりもたらされる解放は、人々の自己の内側でうごめき他者を束縛し傷つけるエゴへの執着からの解放を示唆する例のようにも読める。

本作品はマードックがアルツハイマーを患う苦しみの中で書かれたこと、ジャクソンが生と死の境をさまようかのような結末さえ提示されていること、これらは、ディアスポラの境界を曖昧にし崩す破壊性と恵みが、生と死の境さえも曖昧にし崩してしまうことに対するマードックにとっての恐怖、およびマードックがそこに感じていたかもしれない恩寵⁹を意味しているのかもしれない。

*テキストは*Jackson's Dilemma* (London: Chatto & Windus, 1995)、日本語訳については『ジャクソンのジレンマ』(平井訳)を用い、引用頁数は文中の()内に数字で示した。

註

※本稿は2016-2018年度日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究)「合衆国東海岸都市部におけるイスラム系移民の文学・文化活動」(課題番号:16K13206)および2016年度恵泉女学園大学研究所研究費「ポストコロニアル文学研究(中東・ジェンダー・多言語状況)」(課題番号:001621987)による研究成果の一部であり、第17回日本アイリス・マードック学会(於・青山学院大学、2015年11月21日)での発表原稿に加筆修正を施したものである。

- 1 マードックはエッセイ“Against Dryness”で、小説における人物描写の在り方としてcrystallineとjournalisticの二通りをあげた。クリスタラインなキャラクターとは寓話などで作家の意図のために作られた類型的であり現実的な手触りが無い抽象的人物のことである。この人物描写方法では、人間性の不可解さや予測できない出来事を制御しフォームに甘んじることになる。それにより予期不可能なことの不快さを回避し慰めを得ることができるが、リアリティーを映し出すことはできず、キャラクターは印象が薄く世間的通例の型にはまったものになる。本論では、ボウヴ論が作者はジャクソンがクリスタラインなキャラクターになるのを避けていると論じていることに着目する。そして、ジャクソンがクリスタラインなキャラクターではなく不可思議な魅力と能力を備えていることを、ディアスポラ的で

あると解釈する (Murdoch, 1961 18-19、ボウヴ 248)。

- 2 本論中では主体とは具体的な手触りのある現実的な人間味を伴った人物造形を意味しているが、本論IIの3「ディアスポラ、ジャクソンが象徴するものとの融合」中の注7、および最終セクション中の注8で言及するよう、ポストコロニアリズムの文脈における主体の定義についてはさらに議論を深めるべきであろう。ポストコロニアルな主体については熊田論および熊田論が扱っているスピヴァク論、また、中井論および中井論が扱っているバーバ論等々が定義および議論の基盤となろう。
- 3 ボウヴ 243、Hashimoto 109-116
- 4 ボウヴ 245
- 5 ディアスポラの定義については、代表的なものとしてはクリフォード、サフラン、コーエン (Cohen) の文献に記されているが、これらは全て現代におけるディアスポラを定義したものである。サフランが述べるよう、ディアスポラとは原義ではパレスチナを追われ世界各地に「離散」したユダヤ人を指したが、現在では狭義のディアスポラだけではなく、より多くのカテゴリーの人々を比喩的に指すようになっている (84)。
- 6 クリフォードは安住しないディアスポラの内包する緊張状態は媒介する役割を担うとし、ディアスポラの「媒介的文化」(mediating cultures) としての役割を重視している。本論ではジャクソンは触媒的であったとしたが、化学的にはそれ自体は変化せずに他の物質に影響する触媒の本来の定義をずらし、自身を破壊してしまうほどのエネルギーを使う媒介者として捉える。
- 7 次段落で言及する中井は、ポストコロニアリズムを定義するにあたり、「植民者」対「被植民者」という従来の二項対立を「脱構築」しなければ、コロニアリズム以降の「雑種化された」世界について記述することはできないとしている (中井 793)。
- 8 『ジャクソンのジレンマ』についてのこの点に関し、1978年出版のマードック作品『海よ、海』についての以下の塩田の2015年の提案に見られるようなポストコロニアルな視点をあてはめることも可能である。すなわち、上記塩田文献の言葉を借りるならば、ベネットは「上から目線」、「支配者意識」を捨て去り、「コロニアルな主体」であるジャクソンと新たな関係性を築こうとしていると見ることもできる。

塩田は2008年文献で『海よ、海』について、同作と同じ頃にサイドの『オリ

エンタリズム』が出されたことに言及し、2015年文献では『海よ、海』には「ポストコロニアリズムの影」が散見するとし、一見対照的に見えるチャールズとジェイムズには共に「上から目線」、「支配者意識」、「宗主国意識」が見てとれるとしている（9-10）。また2008年文献では、同作の多くの周縁的な出自の人物が宗主国意識をもつ人物とは対照的に描かれていることに触れ、このような点から「マイノリティをめぐる作者の価値観が浮上する可能性がある」としている（147）。

『ジャクソンのジレンマ』においては、当初周縁的な状況にあったジャクソンが次第に影響力を増し主流派の人物らの内面に入り込んでいく点で、正にマードックの新たな価値観がこの絶筆において提示されているとも言える。しかも、単純に支配者と被支配者の立場の逆転が起こるという展開はなくジャクソンがあくまでも可変的なアイデンティティを維持し続けることは、作者にとっての亡くなる四年前の絶筆における究極の新しい境地を暗示しているのかもしれない。

- 9 先に引用したアイデンティティの喪失についてティム伯父とベネットが語り合う場面で、ティム伯父はそれを“a gift”あるいは“presents”とさえ捉えており、これらを平井は全て「恩寵」と訳している（Murdoch 11、平井訳 18）。

参考文献：

- 有馬弥子 「ディアスポラの女性の自己再生——バーラティ・ムカジーの作品にみるインド出身の女性たち」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』植木照代監修 山本秀行、村山瑞穂編 世界思想社 2011. 296-317.
- . “One Story in the South Asian American Diaspora: The Case of *My Own Country* by Abraham Verghese.” 恵泉女学園大学紀要 第20号 2008. 43-70.
- . “The Awakening of a Second Generation Protagonist to Diaspora Identity in Jhumpa Lahiri’s ‘Unaccustomed Earth.’” 恵泉女学園大学紀要 第27号 2015. 149-173.
- 熊田泰章 「文化の複数性原理における自己と他者——<多文化主義を問い返す反復する問——> Hosei University Repository 2011.
- 塩田勉 研究発表要約「『海よ、海』におけるポストコロニアリズムの影」*The Iris Murdoch Newsletter of Japan*. No. 16 March, 2015. 9-10.
- . 「『海よ、海』(1978)」『全作品ガイド アイリス・マードックを読む』日本アイリス・マードック学会編 彩流社 2008. 141-148.
- 中井亜佐子 『他者の自伝——ポストコロニアル文学を読む』 研究社 2007

- . 「ポストコロニアリズム：postcolonialism」 『英語文学事典』 木下卓、窪田憲子、高田賢一、野田研一、久守和子編著 ミネルヴァ書房 2007. 793.
- 日本アイリス・マードック学会編 『全作品ガイド アイリス・マードックを読む』 彩流社 2008.
- 平井杏子 「アイリス・マードック著 『ジャクソンのジレンマ』の翻訳を終えて」 『学苑』 No.750 2003・2. 140-141.
- . 「解説——アイリスへの哀歌」 『ジャクソンのジレンマ』 平井杏子訳 彩流社 2002. 363-374.
- 広瀬桂司 「〈ディアスポラ〉意識の変化——新たなアイデンティティへの挑戦」 『越境、周縁、ディアスポラ——三つのアメリカ文学』 松本昇、広瀬桂司、吉田美津、松原美恵、吉岡志津世編 南雲堂フェニックス 2005. 16-23.
- ボウヴ、シェリル・K 『アイリス・マードック読解——作品批評と分析』 山本長一訳 彩流社 2008.
- マードック、アイリス 『ジャクソンのジレンマ』 平井杏子訳 彩流社 2002.
- 吉田美津 「ディアスポラのヴィジョンのユートピア・ディストピア的緊張関係」 『越境、周縁、ディアスポラ——三つのアメリカ文学』 松本昇、広瀬桂司、吉田美津、松原美恵、吉岡志津世編 南雲堂フェニックス 2005. 32-39.
- Bhabha, Homi K. "Culture's In-Between." *Questions of Cultural Identity, 1st Edition*. Ed. Stuart Hall and Paul du Guy. Thousand Oaks and New Delhi: Sage Publications of London, 1996. 95-108.
- Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch*. U of South Carolina. 1993.
- Clifford, James. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge: Harvard UP, 1997.
- Cohen, Robin. *Global Diasporas: An Introduction*. Seattle: U of Washington P. 1997.
- Hall, Stuart. "Cultural Identity and Diaspora." *Identity: Community, Culture, Difference*. Ed. Jonathan Rutherford. London: Lawrence & Wishart, 1990. 222-237.
- Hashimoto, Nobuko. "Jackson's Dilemma is Iris Murdoch's 'Tempest.'" *Kawasaki Journal of Medical Welfare*. Vol. 3, No. 2, 1997. 109-116.
- . "The Fusion of West and East as Seen in *Deep River* and *Jackson's Dilemma*." *Kawasaki Journal of Medical Welfare*. Vol.4, No.2, 1998. 111-121.
- Heptonstall, Geoffrey. "Trust and Betrayals." *Contemporary Review*. Vol. 268 Issue 1560, January 1996. 51-52.

- Kakutani, Michiko. "A Broken Engagement As Tragic Metaphor." *The New York Times*. Tuesday, January 9, 1996.
- Love, Barbara. "Murdoch, Iris. Jackson's Dilemma." *Library Journal*. November 1, 1995. 107.
- Lowenstein, Joanna G.. "An Author's Struggle." *World Press Review*. December 1996. 35.
- Meyers, Jeffrey. "Reconsiderations: Iris Murdoch's 'Marsyas.'" *The New Criterion*. January 2013.
- Miner, Valerie. "The Butler Did It." *The Nation*. January 8/15, 1996. 32-34.
- Morton, Brian. "Fiction." *The Times Educational Supplement* 4140. November 3, 1995. 11.
- Murdoch, Iris. "Against Dryness: A Polemical Sketch." *Encounter* 16:(1) (Jan. 1961): 16-20.
- . *Jackson's Dilemma*. London: Chatto & Windus, 1995.
- Radhakrishnan, Rajagopalan. *Diasporic Mediations: Between Home and Location*. Minneapolis, U of Minnesota P, 1996.
- Seaman, Donna. "Murdoch, Iris. Jackson's Dilemma." *Upfront: Advance Reviews*. Booklist / October 15, 1995. 364.
- Steinberg, Sybil. "Forecasts: Fiction." *Publishers Weekly*. 242 (43), 1995. 57.
- Virginia Quarterly Review*. "Reviews the book 'Jackson's Dilemma,' by Iris Murdoch." Summer 96, Vol. 72, 95.